

中国人日本語学習者の漢字熟語の同音判断に 構音抑制が及ぼす影響

—音韻変換能力の影響—

○馬 達・森田愛子

(広島大学大学院教育学研究科)

問題

何かを読むときに行われる音韻情報処理には、構音コントロール過程を経るタイプと経ないタイプがあることがわかっており、日本語母語話者が同音判断をする際に用いているのは后者である(森田・齊藤, 2012)。馬・森田(2018)は、森田・齊藤(2012)と同じ刺激を用いて実験を行い、中国人日本語上級学習者が前者の音韻情報処理を用いている可能性を示した。ただし、その刺激には日本語学習者には親近性の低い熟語が多く含まれていた。また、上級学習者の中でも音韻情報処理能力の個人差が大きかった。本研究では、熟語刺激を改訂し、学習者の音韻変換能力を測定した上で、それが高い者のみを対象として実験を行った。音韻変換能力が高い者は、より母語話者に近い音韻情報処理を行うかを検討した。

方法

参加者 日本語能力試験 N1 に合格した、中国語を母語とする大学院生。事前に 40 名を対象とした読み上げ課題(画面に呈示される漢字二字熟語をできるだけ速く正確に読み上げる課題)を実施し、その音読潜時が平均より短かった 25 名が実験に参加した。

実験計画 構音抑制(あり・なし)の 1 要因参加者内計画。

課題 2 つの日本語漢字二字熟語が同音語かどうかを判断する同音判断課題を実施した。

刺激 核となる熟語(例: 指示)と、その同音語(例: 支持)および非同音語(例: 天国)の 3 つからなるセットを 54 セット用意した。同音語あるいは非同音語を核の熟語と対にして呈示した。ただし、同じ熟語が 1 人の参加者に 2 回呈示することがないようにカウンターバランスをとった。

手続き 個別実験を行った。1 試行の流れは次

のとおりである。まず注視点として「+」を画面中央に 200 ms 呈示した。続いて 300 ms のブランクの後、2 つの熟語を横書きで水平に並べて呈示した。同音語だと判断した場合には青いキー、同音語ではないと判断した場合には赤いキーを押すように教示した。54 試行のうち、半数の構音抑制条件では、参加者に「ザ、ザ、ザ」と一定のリズムで唱え続けることを求めた。

結果

反応時間 平均反応時間を Table 1 に示す。2(同音性: 同音語・非同音語) × 2(構音抑制: あり・なし)の 2 要因分散分析を行ったところ、同音性の主効果は有意傾向であり、同音語に対して反応時間が短かった。構音抑制の主効果は有意ではなかったが、交互作用は有意傾向であった。同音語が呈示された場合にのみ、構音抑制あり条件で反応時間が長い傾向があった。

誤反応率 平均誤反応率を Table 2 に示す。同音性の主効果は有意であり、同音語に対して誤反応が多かった。構音抑制の主効果は有意傾向であり、構音抑制あり条件で誤反応が多い傾向があった。交互作用は有意ではなかった。

考察

反応時間と誤反応率のいずれにも、傾向ではあるが構音抑制の効果が見られた。この結果は馬・森田(2018)と類似している。すなわち、音韻変換能力の高い中国人日本語上級学習者でも、母語話者とは異なるプロセスで音韻情報処理を行っており、構音コントロール過程を経るタイプの音韻情報処理を行っていることが示唆された。また、同音語に対して反応しにくいという結果も、馬・森田(2018)と同様であった。これは日本語の同音語が中国語では非同音語であるためであり、判断に母語が干渉した可能性を示している。

Table 1 同音判断における反応時間 (ms)

	同音語		非同音語	
	反応時間	SD	反応時間	SD
構音抑制あり	1256.9	(289.2)	1251.4	(227.8)
構音抑制なし	1187.9	(232.3)	1251.5	(231.1)

Table 2 同音判断における誤反応率 (%)

	同音語		非同音語	
	誤反応率	SD	誤反応率	SD
構音抑制あり	11.7	(10.0)	5.4	(6.4)
構音抑制なし	6.9	(7.2)	3.3	(7.0)